

■図書紹介■

梶住忠久・宮原悟・栗原久著

『グローバル政治経済入門』

(黎明書房, 1992年)

杉田孝之*

昨今の日本経済におけるバブル崩壊、ヨーロッパ共通通貨の導入、為替相場の激動、株価の暴落、貿易摩擦の深化、民族主義の台頭など、いま国際経済や国際政治は大きく揺れている。この激動する世界を理解するのに最適な書が刊行された。それが『グローバル政治経済入門』である。

そもそも社会科教育は、子供たちの社会認識を科学的・合理的に理解させることが目的とされている。この目標を達成させるためには、社会諸科学や歴史学・地理学などの成果が当然必要になる。本書では「グローバル」という言葉をキーワードにすえて論述している。

例えば本書は「地球全体の利益、すなわち『地球益』や『人類益』の実現に関心を」もつこと、「活動に積極的に参画できる能力・資質の育成をめざす教育」を目的としている。しかし、この「グローバル教育」は生徒の国民的自覚や愛国心を否定するものではなく、正しい意味での国民意識を基盤としてこそ、「地球益」や「人類益」の実現に関心をもちことができ、その実現、推進に積極的に参画しようとする「グローバル公民性」を保持することができると思う。

本書はグローバル社会を理解するポイントとして、経済理解をあげている。「何を」「いかに」「誰のために」生産するのかという、資源の「希少性」の問題に対して市場メカニズムや政府の経済的役割や貿易論などの具体的事例をあげながら説明している。グローバル社会を理解する第二のポイントとして、国際関係についての理解が必要になってくるが、本書では「リアリスト・パラダイム」、「トランスナショナル・パラダイム」、「民族自決パラダイム」をあげて説明しているが、従来からの国家中心的な見方が後退して、国境を越えた主体や出来事によって、世界が統合されつつある。したがって、この変容する世界に対して単に「相互依存」や「利害調整」だけで考えるのではなく、国家、民族の共存、連帯が必要である。

社会科教育におけるグローバル教育は地球上での様々な問題に、人類共通の問題としてとらえさせ、一個人としてではなく、地球全体、世界全体を視野において解決していく方法や態度を身につけさせたい。そのためには社会科教師が“今現在”を的確に把握して教材化する必要がある。ただ本書に「グローバル社会」に対する実際の教材化や授業実践への視点が少ないのは非常に残念である。現場の一教師として次回に本書をもとにした教材化を期待したい。以上、浅学の非礼を顧みず意見を述べさせていただいたが、本書が激動する世界を理解するのに有効な書であることは間違いない。本書が多くの読者に活用されることを期待する。

* 千葉県立浦安南高等学校